

主 題：偽教師へのさばき 6

聖書箇所：ペテロの手紙第二 2章20-22節

今朝はペテロの手紙第二2章20節の箇所からです(8/6の続き)。かなり長い間「ガラテヤ人への手紙」を見て来ましたが、また、このペテロの手紙に戻って続けてみことばを学んでいきましょう。

ペテロはⅠペテロ2:16で「あなたがたは自由人として行動しなさい。…」と命じています。そして、私たちは自由人として行動するとは具体的にどう生きることなのかをパウロの教えから見て来たのです。イエス・キリストを信じて罪から解放されたクリスチャンたちは自由人であると、そのように聖書は教えています。罪の束縛から解放されたゆえに、罪の束縛から自由とされたゆえに、私たちは新しい生活を過ごすことが可能となりました。どんな新しい人生のことなのか？神の栄光のために生きる人生です。神のみこころが為されることを喜ぶ人として私たちは生きることができるのです。なぜなら、神のみこころが為されるときに神の栄光が現わされるからです。だから、そのことを求めながら、そのことを願いながら、その選択をしながら生きて行く新しい人生を歩むことができる自由人です。

ペテロは自由人としての歩みにおいて、その歩みを邪魔する悪がすでに教会の中に存在していると私たちに教えてくれています。このⅡペテロ2:1から見ていくと、イスラエルの中ににせ預言者が出たことが書かれています。そして、その後、同じようにあなたがたの教会の中にもにせ教師が現れるようになると言っています。現在のトルコに当たりますが、その地域に点在する幾つかの教会に宛てて、クリスチャンたちに宛ててこの手紙は記されているのですが、ペテロはこのように言っています。「:1 しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現れるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。」と、彼らは確かににせ教師でした。真理ではなかった。偽りを教えていたのです。また、その教えだけでなく彼らの生き方にも問題がありました。「:2 そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。」と、多くの者がこの影響を受けていたのです。「:3 また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食い物にします。」と、確かに、神のみわざが為されるときには悪の働きも為されるのです。教会の中にこのような悪の働き人が送られて教会の一致を乱そうとします。そういうことをペテロは重々知った上でこのメッセージを送るのです。

パウロもまた、ガラテヤ書で学んだように、同じ地域の教会に手紙を送っています。現在のトルコです。パウロのことばを借りるなら「忍び込んだにせ兄弟たちがいる。かき乱す者たちがいる。」と言います。そして、彼らは福音のメッセージを変えてしまったり、みことばの真理に人々が従わないようにかき乱しているのです。ガラテヤ2:4「実は、忍び込んだにせ兄弟たちがいたので、強いられる恐れがあったのです。彼らは私たちに奴隷に引き落とそうとして、キリスト・イエスにあって私たちの持つ自由をうかがうために忍び込んでいたのです。」、ガラテヤ1:7「ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるのではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。」、ガラテヤ5:7、10、12「:7 あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたを妨げて、真理に従わなくさせたのですか。」「:10 私は主にあって、あなたがたが少しも違った考えを持っていないと確信しています。しかし、あなたがたをかき乱す者は、だれであろうと、さばきを受けるのです。」「:12 あなたがたをかき乱す者どもは、いっそのこと切り取ってしまうほうがよいのです。」

ですから、少なくとも、この当時の教会の信仰的な状態がよく分かります。偽りによって惑わされていたのです。教師は真理と言って偽りのメッセージを語っていたのです。そこで、ペテロは教会に入り込んで来た「偽りの教師たちの本性」を明らかにするのです。それを明らかにすることによって、教会員に警告を促すのです。彼らの教えに従ってはならないと…。私たちはこれまでに偽りの教師たちの本性、本当の姿を八つ見て来ました。

* 「にせ兄弟たち」「にせ教師たち」の本性

A. さばきの確実性 : 彼らへのさばきを三つの史実から証明した。 1-8節

B. 公正なさばき 9節

C. 暴露されたにせ教師たちの罪・真実 :

このにせ教師たちが確実にさばかれる理由 10a-16節

1. 肉の奴隷たち 10a節

2. 権威を侮る者たち 10a節

3. 大胆不敵な者たち 10b節

- 4. 尊大な者たち 10 b 節
- 5. 高慢な者たち 10 b-13 a 節
 - 1) 天使たちとの比較 = 高慢であった 11 節
 - 2) 動物たちと比較 12 節
- 6. 偽り者・惑わす者たち 13 b-14 節
- 7. 強欲な者たち 15-16 節
- 8. 誘惑する者たち 17-19 節

彼らは真理を語らないだけでなく、真理を惑わし、人々の中に教会の中に混乱をもたらしていました。それは彼ら自身が真理を信じていなかったからです。そして、今日は2:20-22から続けて九つ目のこの「偽りの教師たち、にせ兄弟たち、にせ信者たち」の本当の姿を見ていきます。

9. にせ信者 20-22 節

20 節には「主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪いものとなります。」と書かれています。

・「そのような人たち」とはだれのこと？

だれに対するメッセージなのか？だれのことを語っているのか？そのことをしっかり考えておかなければなりません。これは文脈から見て、最初に話したように、教会の中であって人々を惑わしていた「にせ教師たち、にせ信者たち」のことが記されているのです。ある人たちはこの20 節を見て「主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって」と、この「知る」ということばから「彼らは救われていたのではないかな？なぜなら、イエスのことを知っていたのだから」と言いますが、ここで教えていることはそうではありません。彼らは救われていませんでした。この「知っている」という名詞は「厳密で正確な知識、認識」ということです。つまり、彼らは真理を正しく知っていたのです。あくまで「知識」として。20 節を見ると「主であり救い主であるイエス・キリストを知る」とあるので、ペテロはここで「このにせ教師たちはイエス・キリストがいったいだれなのか？その正しい情報を得ていた。」と言うのです。「イエス・キリストは主である、イエス・キリストは救い主である。」と。私たちはそのことを信じています。イエスは確かに主である、すべての主権者である、この方がすべてを支配しておられる、この方のみこころが成される、この方が唯一の神であると、確かに、それは聖書が教えていることです。そして、イエス・キリストこそが私たちに与えられた唯一の救い主であると。私たちはそのことを信じています。この人たちもこの真実を知っていました。しかし、ただその知識しかありませんでした。

・「のがれ」とは？

そのことは次のみことばを見てください。「世の汚れからのがれ、」とあります。いったい何からのがれたのか？「世の汚れから」です。「罪から、罪にさばきから」のがれとは書かれていません。恐らく、こういうことでしょう。想像できることは、彼らは人間の欲望の赴くままに生きることによってこの世のいろいろな道徳的な汚れに染まっていたのです。どの時代でも同じです。自分の思い通りに、自分の好きなように生きていきたい、その結果、罪に染まってしまいます。そのときに、この人はそのような生き方から逃れたいと思ったのでしょうか。もしかすると、罪の生き方から生じる様々な問題や悲劇に直面したのかもしれませんが。自分の情欲のままに生きていてその結果、子どもをみごもってしまったというケースもあるでしょう。自分の友人たちの悪い影響を受けて結果的にドラッグに走ってしまった。アルコールに走ってしまったと、いろいろなことがあるでしょう。

悲しいことに、私たちのこの国、日本においては年間約100万人の子どもたちが生まれると言いますが、その中の約1/5が人工中絶でいのちを落とされています。殺されています。敢えてそう言うのは、これは殺人だからです。また、ドラッグの問題も無くなることはありません。私がアメリカに行ったときはいつも「日本にはそんな問題はない」と自慢していたのですが、今は若年層にまでその問題が広がっているということを私たちはニュースで聞いています。犯罪全体が減少傾向にありながら、これは犯罪統計2015年に拠るのですが、薬物事犯の特出した増加ぶりは気になるとあります。薬物の問題が増えていくと言うのです。誘惑されるのかもしれませんが、そのような問題にいつの間にかのめり込んでしまう可能性があります。

そして、ある時気付くのです。こんな生き方をしているはいけない、間違っていると。恐らく、この人物もそうだったのでしょうか。罪の中を歩んでいてふと我に返って「これじゃいけない。自分の生活を変えなければいけない。」と。そこで友人から離れたかもしれない。自分の生活を変えようと少しは努力をしたかもしれない。恐らく、そういう人だったのです。でも、残念なことに、そこから離れたのは一時的でした。再び、元の状態に戻ってしまいます。20 節にあるように「その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、」と。「巻き込まれて」とは「それに関わる」ということ、「征服される」とは「打ち負かされ

てしまう、それに負けてしまう」ということです。結果的に、一時的に頑張ってみるのですが、道徳的に少しは正しいこと、人の道に沿ったように頑張ってみようと思いますが、それは長く続かないのです。元の木阿弥です。

そして、みことばは「そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪いものとなります。」と続きます。このような人たちは、自分が一生懸命努力をしたのに願っていたものを得ることができないという失望感に襲われたときに、以前よりも悪い生活が始まるということです。実は、イエスがそのようなことを話しておられたことを皆さんは憶えておられるでしょうか？マタイ12章のところですか。恐らく、皆さんはここを初めて読んだときいったい何のことを話しているのか不思議に思われたかもしれません。マタイ12：43-45「:43 汚れた霊が人から出て行って、水のない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。:44 そこで、『出て来た自分の家に帰ろう』と言って、帰って見ると、家はあいていて、掃除してきちんとかたづいていました。:45 そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みな入り込んでそこに住みつくのです。そうすると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。邪悪なこの時代もまた、そういうことになるのです。」、ここで語られていることは今私たちがみているところと全く同じことです。説明します。「汚れた霊」がある人に宿っていたのです。悪霊たちは人間や生き物に宿ることを好むようです。この霊がその人から出て行くのですが、その理由もその詳細も一切記されていません。ただ言えることは、この悪霊が追い出されたのは神のみわざではなかったということです。なぜなら、この悪霊はまた元に戻って来るからです。先ほども見たように、自分で一生懸命努力をして自分の生活を変えようとした。すると、ある期間はその悪霊の影響から離れるかもしれませんが、でも、自分で自分を変えることが出来ないという現実遭遇したときに、今までよりも悪い生活がその人に待っている。そのことが書かれています。「水のない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。」とこれは比喩的な表現です。悪霊が自分に居心地のいい場所を探しているのです。でも見つからないので出て来た自分の家に帰ろうとします。「家はあいていて、掃除してきちんとかたづいていました。」と、そこにはだれも住んでいないということです。今度は45節にある通り「出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みな入り込んでそこに住みつくのです。」と、悪霊の中にも罪の大きい悪霊がいるのです。みな同じではないのです。そうすると、前よりも状態は悪くなるとうのです。

恐らく、私たちも経験したことがあるでしょう。自分で自分を変えようと努力してもそれができないという現実に出ると憤りを覚えます。そうすると、多くの場合、諦めから自己憐憫に陥ってしまって「がんばってもどうせだめなんだ」と反動的に罪に対して無抵抗、無防備になってしまいます。その結果、一生懸命正しくなろうと努力していたときよりも、どうせだめだからと、どんな罪も歓迎してしまうのです。その状態は確かに初めよりも悪くなってしまいます。

イエスが言われたこと、そして、ペテロが私たちに教えていることは全くそのとおりです。ですから、私たちが覚えるべきことは、このにせ教師たちでも自分で自分を変えたいと思って一生懸命努力をしたのです。「変えたい」と思うことは正しかったのですが、その方法が間違っていたのです。なぜなら、私たちは自分で自分を変えることはできないからです。それができるのは神だけです。神のところに助けを求めて出て行くなれば、神はその人を新しく造り変えてくださるからです。コロサイ1：27をご覧ください。「神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」、

*** 結局、自分の努力で罪に完全に勝利することは出来ない！**

彼らは真理を知ってはいました。知識としてもっていました。でも、救いには与っていませんでした。私たちが分かっていることは、地獄には聖書についての豊富な知識をもった人たちが大勢いるということです。このことをよく考えてみてください。どんなに聖書のことを知っていようと、聖書の中に記されているイエス・キリストのことをどれ程知っていようと、神の属性、教理をどれ程知っていようと、その人がイエス・キリストを信じていなければ、救いはその人のものではありません。イエスを信じていない人がたくさんいるということです。ここにもその例が挙がっています。

1) 彼らの罪 : 真理を知りながらそれを拒む罪 21節

彼らがどんな罪を犯したのか、21節にはそのことが書かれています。「義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったのです。」と、つまり、彼らの問題は真理を知りながらそれを拒んだ罪です。真理を聞いていながらそれを受け入れようとしない、却って、それを拒んでしまう罪です。「義の道を知っていながら、」という「義の道」とは「救いの道」のことです。Ⅱペテロ2：2には「そして、多くの者が彼らの好色にならぬ、そのために真理の道がそしりを受けるのです。」と、「真理の道」とあり、2：15には「彼らは正しい道を捨ててさまよっています。不義の報酬を愛したペオルの子パラムの道に従ったのです。」と、「正しい道」とあります。

また、マタイ21：32には「というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持って来たのに、彼を信じな

かった。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかったのです。」と書かれていて、ここでも「義の道」とあります。神のメッセージであり、私たち人間にとって最も大切な救いのメッセージです。彼らはその道を知っていたのです。21節に「知っていながら、」とあります。厳密で正確な知識をもっていたのです。イエスがだれなのかを知っていたのです。イエスが主であり救い主であることを知識としてもっていたのです。しかし、信じていないのです。だから、「自分に伝えられたその聖なる命令にそむく」と書かれています。聖なる神から与えられ、また、信じる者に罪からのきよめ、救いを与える教えることです。どうすれば罪が赦されて聖くされるのか？どうすれば罪が赦されて永遠のいのちをいただくことができるのか？その救いのメッセージが伝えられていたにも関わらず、彼らはそれに対してどうしたのか？「そむく」と書かれています。これは「戻る、自分が信じていた元の教えに戻る」ということです。

すばらしい教えを聞いていた、でも、彼らが最終的に選択したのは「いままで自分が信じて来たかつての教えに戻る」ことです。ヘブル2：3に「私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、どうしてのがれることができます。この救いは最初主によって語られ、それを聞いた人たちが、確かなものとしてこれを私たちに示し、」とあります。私たち人間に与えられた唯一の救いはイエス・キリストによるのみです。この方だけが私たちの身代わりとなって十字架上で死んでくださったからです。そして、その死からよみがえられたお方だからです。

みことばが教えるように、神ご自身が私たちが救うために備えてくださった救い主はイエス・キリストしかいないのです。ところが、ヘブル2：3にあるように「こんなにすばらしい救いをないがしろにした」と、「ないがしろにした」とは「侮り軽んずること、軽視すること、無視すること、気に留めないこと」です。そのことを聞いていてもそれに心を開こうとしないのです。大切なことではないとして片づけてしますのです。そうして、この救いを拒んだのなら、どうしてその人は救われるのか？ヘブル書が教えるように、また、このペテロが教えるように、彼らが救いに与っていないのはどうしてか？救いの真理を聞いていながら自分の意志をもってそれを拒んだからです。

*** 信者なら離れない**：もし、彼らが本当に信者であるなら、彼らは絶対に真理から外れることはありません。真理から離れて行ってしまうことはないのです。皆さんもよくご存じのIヨハネ2：19には「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。」とあり、ともに神を崇めている仲間の中からある人が出て行くのです。そういうことはどの時代でもどこの国でもあります。私たちもそのような悲しい出来事を何度も目撃しています。この箇所でもヨハネが言わんとしたことは、では、なぜ、彼らは自分たちの教会や信仰から出て行ってしまうのか？その理由は、彼らがもともと仲間ではなかったからだということです。つまり、彼らが出て行くのは彼らが救われていなかったからだと言うのです。続けてこう言います。「もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。」と。ですから、何があってもこの信仰にとどまる人たちは、信仰から離れて行かない人たちは、救いに与っている人たちだということです。でも、離れていってしまう、それは彼らが救われていなかったということを意味すると言います。このように続きます。「しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためなのです。」と。

イエスを信じた者たち、イエスによって救われた者たちが絶対にこの神から離れないのは、救いが神からのギフトだからです。何度も学んでいるようにもうお分かりでしょう。私たちが神を選んで神にしがみついているなら疲れてしまって手を放すかもしれません。でも、救いはそういうものではありません。救いは神が働いて神があなたを捕まえてくださるのです。その神は疲れることがないゆえにあなたを離すことがないのです。だから、神によって救われた人はその救いから神から絶対に離れて行くことがないのです。

イエスはヨハネ10：28、29でこのように言われました。「28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」、なぜなら、全能なる神が捕まえているからその人が神から離れてどこかへ行ってしまうことなどあり得ないのです。「29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」と続きます。神によって救われた人は絶対に神を見捨てて神から離れてこの世的な歩みを継続することは有り得ないのです。

では、そのような人は実際にいるけれど彼らの救いはどうなのか？救われていない可能性が高いということです。みことばがそのように教えます。今日のテキストIIペテロ2：21を見ると「義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむくよりは、…」彼らは自分たちの意志をもってそむいたのです。それを捨ててそれを拒んでかつての教えへと戻ったのです。そこでこう続きます。「それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったです。」と。「義の道」「聖なる命令」は「救い」のことです。「それを知らなかったほうがよかった」と言います。

なぜ、このようなことを言ったのか？真理を知った上でそれを拒んだ者たちにはより厳しいさばきがあるからです。真理を知っていながらそれを自らの意志で拒んだとしたら、あなたに対するさばきはより厳しいものになるのです。イスカリオテのユダに対してイエスが言われたことを思い出してください。マタイ 26 : 24 「確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです。そういう人は生まれなかったほうがよかったです。」、このような人には他の人よりもより厳しいさばきがあるからです。ヨハネ 19 : 11 でイエスはこう言っておられます。「イエスは答えられた。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。」と。

いろいろな罪人がいて、いろいろな人たちが「イエスを十字架につけよ」と叫びました。多くの人たちはイエス・キリストの側に立って彼を弁護しようとはしなかったのです。救いを拒んでいるならみな罪人でありみなさばきを受けるのです。しかし、その中でも「わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。」と。罪人のさばきの中でも違いがあるということです。このように神の真理を知っていながらそれを自らの意志をもって拒んだ者たちにはそうでない者たちに比べてより厳しいさばきがあるということです。

ですから、私たちが考えなければいけないことは、私の救いは間違いないかどうかということです。あなたは真理を聞いているからです。もしかすると、それを聞きながら拒み続けているかもしれません。もしそうなら、あなたが覚えなければいけないことは、あなたはそうでない人に比べてより厳しいさばきを神から受けるということです。そのことをペテロはここで言うのです。

2) 救われていない理由 22節

その上で、彼らが本当に救われていない理由がまた 22 節に記されています。「彼らに起こったことは、「犬は自分の吐いた物に戻る」とか、「豚は身を洗って、またどろの中にくるがる」とかいう、ことわざとおりです。」と。ペテロはこのようにことわざを引用してこの人たちのことを表現するのです。ユダヤ人たちが嫌う 2 種類の動物について語っています。犬と豚です。どちらも汚れた動物と見られていたからです。なぜなら、犬は自分が嘔吐したものに反感をもってそこに戻っていくからです。そのような光景を見られたことがあるでしょう。普通ならそんなところに近づこうとしないのに、犬はそこに戻って行ってしまふのです。また、豚はどんなにからだを洗ってやってもまた泥の中に好んで入って行ってしまふ。この動物がもつ習性のことです。皆さんの中にも犬が好きな人も豚が好きな人もいるでしょう。それがのろわれているということではありません。そういう習性のことです。

ソロモンはこのように言っています。箴言 26 : 11 「犬が自分の吐いた物に帰って来るように、愚かな者は自分の愚かさをくり返す。」と。では、このことわざをなぜペテロが用いたのか？まさに、これはこの人たちのことを表しているからです。今見て来たように、この人たちは自分の努力で一生懸命自分を変えようとして来たのです。でも、本質的な部分が変わらなければ何も変わらないということです。一時的に変化があったとしても…。犬は嘔吐することによって気分が晴れるかもしれないけれど、また、そこに戻って行ってしまいます。豚はからだをきれいに洗ってもらってもまた泥を見つけるとそこに自分から入って行ってしまふ。本質が変わらなければ何も変わらないということです。外側を良くしようとしても内側が変わらなければどうにもならないのです。

この偽りの教師たちの問題は、彼らは内側を変えようとはしなかったことです。神が私たちの内側を変えてくださるのに彼らはそれを拒んでいたのです。そして、彼らはここにあるようにその内面を変えようとして努力したけれどそれは続かなかったのです。ペテロはこのようにこの人たちの問題を明らかにした上で、私たち人間に一番必要なことは私たちの内側が変えられること、心がきよめられることだと教えるのです。救いとはどういうものか？またペテロが教えてくれています。Ⅱペテロ 1 : 3、4 を見てください。「:3 というのは、私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです。」、イエス・キリストの救いは信じたすべての人に永遠のいのちを与えると同時に、新しい生活を送れるようにその力をもっておられるから、私たちを完全に生まれ変わらせることができるのです。そして、「:4 その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。」と、この救いは救いに与ったひとり一人を神のご性質に与る者へと変えて行く力をもっていると言います。

天国に行きたいからイエスを信じた、というようなことではありません。救いとはあなたを根底から生まれ変わらせてくださる。あなたを罪から解放して、神のみこころに従って生きる、それを喜びとする自由人と変えてくれるのです。罪を憎んで神の栄光のために生きていきたい、自分を喜ばせることよりも神を喜ばせて生きたい、そういう人へと生まれ変わらせる力をもっている。それが神の救いだということです。

この人たちは知識はありました。でも、その生活は変わって来ないのです。外面的な部分が少し変わったとしても本質は変わらないのです。神の救いは心を変えるのです。変えられた心から正しい行いが生まれて来るのです。それが救いです。まさに、ここでペテロが教えたことを、私たちは「ヘブル人への手紙」の著者によって同じことを教えられるので、最後にそれを見ましょう。

*ヘブル10：26から、「にせ信者、にせ教師」についての教え

ここに偽りの信者、また、偽りの教師たちに関する教えが記されています。

1. 真理の知識を受けた人

26節「もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。」とお気づきのように、「真理の知識」を受けているのです。先ほどから見てるように、神の真理を知っている、福音によって救われることも、福音のメッセージそのものも、十字架におけるイエス・キリストの贖いのみわざ、そして、その後三日目によみがえって来るという復活のことも、再臨のことも、このような真理を知っているのです。頭で理解しているのです。でも、その真理を心から受け入れていないのです。「ことさらに」とあります。これは「喜んで、自ら進んで、自発的に、自主的に」です。ですから、メッセージを聞いてその真理を知っても自分は自発的に自主的にその道を選択するのではないということです。

「ことさらに」何を選択するのか？「罪を犯し続ける」と書かれています。真理を聞いても知識として持っていて、彼らを選択していることは継続して自分の意志で罪を犯すこと、神に逆らい続けていくという生き方です。

2. 永遠の滅び 26b、27、30、31節

その結果、その人には何が待っているか？

1) 罪のためのいけにえなし(26b節) : 26節の後半「罪のためのいけにえは、もはや残されていません。」、唯一の救い主であるイエス・キリスト、罪を赦してくださるこの神が与えてくださった神の小羊、この救い主を拒んだならどのようにして救いを得ることができるか？「罪のためのいけにえは、…」もう残っていない、イエスしかないのです。それを拒むならそれ以外のいけにえはありませんと。

2) 神の怒り(27、30、31節) : 27節「ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」、30-31節にも「:30 私たちは、「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする」、また、「主がその民をさばかれる」と言われる方を知っています。:31 生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。」、このように神の怒りが記されています。だれに対するものか？すべての神に逆らった者たちにはですが、この文脈の中では「真理を知りながらその真理を拒んだ者たち」に対してです。そのさばきはより重いものだと言います。「復讐」とありますが、これは「罪に対する神のさばき」のことです。ローマ12：19に「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」と書かれているとおりです。」とあるとおりです。

つまり、まとめると、神に逆らった者には必ずそれにふさわしい報いが与えられるということです。27節に「恐れながら待つよりほかはないのです。」とありますが、「逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを」と、神のさばきを恐れながら待たなければならないのです。何のことか？そのさばきが確実に来るからです。だから、恐れながら待つのです。その日が確実に来るから「恐れながら待つよりほかはないのです。」

皆さん、ここに非常に悲しい人たちのことが出て来ています。ペテロはまさにこの2章全体を使ってその人たちのことを記しました。彼らがいったいどういう人たちなのか？そのことを明らかにするのですが、同時に、ペテロはこの人たちには確実に神から厳しいさばきがあるということを約束しました。今、見て来たとおりのみことばを二つ見ましょう。ヨハネ8：55「けれどもあなたがたはこの方を知ってはいません。しかし、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしはあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っており、そのみことばを守っています。」、Iペテロ2：1、2「:1 ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、:2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」

私たちはこの学びを通して自らに問い掛けなければいけないことは、「私は主について知っているのか、それとも主を知っているのか、どちらか？」です。なぜ、こんなことを皆さんに度々問い掛けるのか？それはあなたの永遠が掛かっているからです。考えなければいけません。この人たちは真理を知っていました。恐らく、どんな質問にも答えることができたでしょう。だれが見てもこの人は救われていないとは思っていませんでした。この人は確実に救われているとだれもが思ったはずですが、そこでペテロは言うのです。悲しいことに、彼らは真理を知っているけれど真理の主を知っていないと。イエスを信じていないのです。私たちの群れにそのような人がいないことを願ってやみません。

でも、これはあなたが決めなければいけません。あなたがどういう選択をするのか？です。これまで通りの選択をして神に逆らい続けるのか、それとも、神の前に正しい選択をして、神によって生まれ変わらせていただくのか…。

私たち自由人は自らの意志をもって神のみこころを求めながら生きる者です。かつては自分のために、自分の欲を満たすために生きていました。でも、神によって救っていただいた私たちは自らの意志をもって神の栄光のために生きて行こう、神に喜ばれることを選択して生きて行こう、この神のみこころが成されることを求めてそれを選択して生きて行こうと、そのような人へと生まれ変わったのです。そこでペテロは「それならそのように生きなさい。自由人として生きなさい。」と命じるのです。

どうですか？信仰者の皆さん、あなたはそのように生きていますか？あなたは毎日の生活のいろいろな選択の中で、何が神に喜ばれ、何が神のみこころなのかを祈り求めながらそれを選択していますか？あなたしたいこと、あなたが望んでいること、あなたが求めていることではないのです。神が求めていること、神が望んでいることを求めるのです。そのような生き方ができるのです。そして、そのように生きている人を「自由人、神の前に喜ばれる自由人」と私たちは呼ぶのです。

ぜひ、そのような人として歩み続けてください。あなたに必要なのは神のみことばです。このみことばにしっかりと立って、どんな惑わしにも惑わされることなく、みことばに従い続けることです。それがあなたに成長をもたらします。それがあなたを変えていきます。どうか、神が望まれる選択をもって神に従い続けていきましょう。

《考えましょう》

1. 20節に記されている人たちが「にせ信者」であることを証明してください。
2. 彼らに一番大きな問題は何だったと思われますか？
3. どうして「命令に背くよりは、知らなかったほうが」良かったのでしょうか？
4. 22節のことわざを説明してください。